

23 明治期ドイツ留学もしくは視察した

眼科医達

○奥沢¹⁾ 康正、ユルゲン・コバチ²⁾

明治期欧州留学熱の影響により多くの医師達が海外留学を夢み実現させている。これ等渡航した医師達の内、眼科学を専科とした留学者達をピックアップすると95名となった。数名の眼科医の留学生活の回顧録をみると異国での生活に大いに戸惑い、望郷の念にかられながらも眼科学の研究に若き情熱を燃やし大きな成果を上げている。留学生の中には生活環境の余りにも著しい変化に心身共異常をきたし事半ばにして帰国した者、又逆に留学生活が余りに長期に渡ったため、異国の妻を娶り帰国しても日本人の生活習慣より掛け離れ過ぎた結果、馴染む事も出来ず地方に引き籠もり、廃業した眼科医も見える。今回は伝記・人物誌・医籍録・眼科雑誌等に載せられた95名にわたる眼科医達の渡航時年齢、留学期間、費用

の負担（公・私費の区別）留学若しくは視察先、留学中の眼科教室と教授達の関わり、研究テーマ、ドクトルメデイターナ、医学博士の有無、帰国後の公的地位、出生地と開業地、生存年数、死因等につき統計的な考察を行った。

結果各項目に不明な人物も多くあり、今後の調査を必要とするが現時点での渡航時年齢は30歳・33歳にピークを見る。留学期間は2年〜3年にかけて最も多いが3年以上にも23人を見る。（但し乗船期間も算入）。費用負担は公費25名・私費58名と、中には家財道具を全て売り、また知人に借入して留学費に当てている者も多い。視察先は、オランダ：1名・ドイツ・スイス（1人）・オーストリア（1人）：92名・米国：2名となり圧倒的にドイツが多い。留学中の眼科教室は21講座となり、中には生理学教室の教授に師事している者もある。研究テーマを留学時ドイツ眼科雑誌に投稿した眼科医は明治43年迄に52名、延べ118論文数を数え、井上達也・河本重次郎・山口秀高は主として五眼科雑誌に（Archiv für Ophthalmologie, Archiv für Augenheilkunde Klinische Zeitschrift

für Augenheilkunde. Centralblatt für praktische Augenheilkunde. Ophthalmologische Klinik.) 7以上の論文を掲載している。ドクトルを得た者は20名となるが不明も多い。出身地は東京…10名・愛知…7名・新潟…6名をはじめ全国にまたがる。卒業校は東京大学…37名・医術開業試験(済生学舎卒を含む)…13名を筆頭に各地方大学卒(岡山(4名)・千葉(4名)・仙台(2名)・愛知(2名)・京大(2名)・京都府医学校(2名)・大阪(2名)・新潟(1名)・島根(1名)・福岡(1名)・熊本(1名)・長崎(1名)・海軍医学校(1名)金沢(1名)を見る。生存年数は60歳以上が45名、死因については肺炎・脳循環障害…直腸癌等が多い。その他師事した眼科教授の数は50名以上となり、中でも W. Uthoff (5名)・O. Everbush (11名)・Axenfeld (12名)・C. Hess (21名)・R. Greef (61名)・A. Peters・Sattler・E. Fuchs (各々6名)・H. Schmidt-Rimpler (5名)・C. Schweigger (4名)等に多くの眼科医が受講している。留学した大学別を見るとオランダ(ウトレヒト大学…1名)、ドイツ(ミュンヘン大学…14名・ベルリン大学…13名・ウルツブルグ大学…13名・フライブルグ大学…12名・ロストツ

ク大学…9名・ブレスロウ大学…8名・ハツレ大学…7名・ハイデルベルヒ大学…4名・マールブルグ大学…3名・エルランゲン大学…3名・ギーセン大学…3名・イエーナ大学…3名・ゲッチンゲン大学…2名・チュービゲン大学ドイツ海軍大学…1名)、オーストリア(ウィーン大学…7名)、スイス(ベルン大学…2名、米國(シアトル大学…1名・コロンビア大学…1名)その他留学した眼科医達が主としてドイツ国内においてどの様な生活をし、さまざまな経験を重ね、帰国後多くの道に進んだ足跡をたどり明治期の医学教育に及ぼした影響につき報告したい。

(1)京都市)

(2)京都府立医科大学招へい研究生)